

法士会報

発行所：法政大学デザイン工学部
都市環境デザイン工学科 同窓会

〒162-0843 東京都新宿区市ヶ谷田町2-33

TEL・FAX (03) 5228 1406

発行人 吉 田 保

編集人 会報編集委員会

同窓会のネットワークの拡大を

法士会(都市環境デザイン工学科同窓会)会長 吉 田 保



毎年、土木学会の年次学術講演会の開催に合わせて、その地の卒業生が集い、同窓会が行われます。昨年は9月6日に、名古屋で大勢の卒業生が参集され盛大に行なわれました。小職も参加させていただきましたが、このような、地域開催される法士会にはこれまで何回か出席した経験がありますが、その度に、全国でこれだけ多くの方々が、様々な立場で活躍されておられるのを知り、驚かされます。どの地区の同窓会も、参加される方々の年齢は社会人になったばかりの方から大先輩まで50歳位の幅があり、その大半の方が初対面である場合がほとんどでした。

昨年10月6日に、市ヶ谷の田町校舎でOBと学生との意見交換会を開催しました。その詳細は、山田理事の寄稿に譲りますが、この場でも、官公庁、ゼネコン、コンサルタント、メーカー等、様々な職業の責任ある立場のOBの方々に、後輩の就職を支援するために集まっていたいただきました。理事のコネクションを利用し集まりやすい東京近郊にお勤めの方々に集まっていたいたわけですが、地理的に顔を合わせる可能性が高いにも関わらず、やはり、ほとんどが初めてお会いする方々ばかりで、改めて同窓生の層の厚さを再確認した次第です。

発注者、受注者を問わず、我々、土木を志した者の主な仕事は、公共・公益に資する社会資本整備事業であります。最近の建設事業の執行システムの特徴として、社会ニーズの複雑化、高度化に伴い、単一の業種のみでは対応できず、異業種同志が組みJVや共同体という形で

業務に携わることが少なくありません。東日本大震災の道路復興事業で用いられているPPP事業のように、これまで発注者と受注者の立場であった行政組織と民間企業とが共同事業体を形成して、一つの仕事に取り組むケースも出てきました。このように複数の組織体がコンソーシアムのような形態で仕事を進める時に、特に重要になるのがお互いのパートナーシップで、この良し悪しが事業の進捗に大きく影響します。そんな時、お互いが同窓生であることがわかれば、親近感が湧き、仕事をスムーズに進める手助けになるのではないかと思います。これまでの、私のコンサルタントとしての経験でも、仕事を終えた頃に、実は、相手組織の担当者が同窓生であったことがわかり、それが縁で、辛づる式に同窓生をご紹介いただき、その後の仕事を進める上で大いに助かった経験があります。全国をカバーするような同窓生のネットワークがあり、それを皆が活用できる形になっていれば、事前に同窓生の居場所がわかるので、どこに行ってもどのような分野の仕事に関わる場合でも力になるのではないかと思います。

我が校の卒業生の数は既に5千人を優に越えており、他の大学に比較し決して少なくありません。しかし、普段、仕事や学会などの対外活動の場で、同窓生と顔を合わせるのには意外と少ないという気がします。土木学会開催地で開催される地区同窓会や本部主催の意見交換会・社会工学セミナーなどへの参加、本誌などの広報媒体の活用を通じて着実に輪を広げて行く方法もありますが、それに加えて、既にある、地域単位、職場単位などの同窓生による様々なジャンルの集まりを、情報活用により連結する形でネットワーク化し、共有活用出来る人材データベースを構築することも有効のように思います。地域や職場によって事情が異なるので一朝一夕には難しいかもしれませんが、今後の同窓会の課題として考えていきたいと思っています。

学科の次なるステップへ

都市環境デザイン工学科 主任教授 宮 下 清 栄

同窓生の皆様には常日頃、大変お世話になっております。初めに大変残念なお知らせをしなければなりません。長年本学の教育研究に多大な貢献をされました、岡 泰道先生が昨年6月17日に胃癌術後癌性腹膜炎により逝去されました。岡先生は1989年に本学に着任し、教育では数学などの基礎科目、河川環境工学、水理学及び演習、水文学、環境アセスメント演習、水圏環境学などの専門科目を担当し、また、卒論研究、修士論文、博士論文の指導を行うなど多くの優秀な卒業生を輩出されました。学内においては学科主任、教授会主任、大学院専攻主任、法政大学図書館副館長、デザイン工学部設置準備委員などの各種委員を分担し、広い人脈を活かし大学運営にも積極的に参画していただきました。学外においては、土木学会幹事、水文・水資源学会理事、日本水文学会委員長、雨水浸透調査研究会委員長の他、土木学会、水文水資源学会、日本河川協会、国土交通省、横浜市などの各種学協会委員として、技術の発

展に貢献されました。

岡先生の自慢の一つに誰よりも「歩くこと」と「文章の間違ひさがし」が早く、学科教員の中では一番元気な先生でしたことは同窓生の皆様もお感じになられていたことと存じます。

先生ご自身が道半ばで大変悔しいことと推察いたしますが、学科としても中心的な存在であった岡先生のご逝去は大変残念でなりません。なお、葬儀は先生の郷里である岡山で執り行われましたが、多くの同窓生に参列していただき見送ることができました。お嬢様の「父の日に亡くなり、なんて父親だと思っています」との言葉が忘れられません。

同窓生の皆様には岡先生の教えに従い、ますます活躍することをお願いいたします。

さて、学科の近況ですが、昨年、高橋賢一先生と満木泰郎先生が退職し、福井恒明先生と藤山知

加子先生が着任されました。また、本年3月末に草深守人先生と牧野立平先生が退職され、草深先生の後任として酒井久和先生が着任される予定です。ここ数年で学部、大学院と完成年度を迎え、学科教員も大幅に若返り「都市環境デザイン工学科」としてさらに発展する体制が整いつつあります。

また本年度はJABEEの中間審査を受審しましたが、お陰様で認定される予定です。今後とも引き続き同窓生の皆様にはご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



高橋先生・満木先生から福井先生・藤山先生にバトンタッチ
(2012年4月歓迎会)

研究室紹介

都市戦略として 景観を考える

福井 恒明 教授

はじめに

2012年4月に都市環境デザイン工学科に着任し、景観研究室を開設いたしました。出身は土木工学で、清水建設にて現場管理と本社での設計業務を経験後、大学に戻りました。学位取得後は国土交通省国土技術政策総合研究所で景観施策の立案支援や、大学でのプロジェクトとりまとめ担当などをしてまいりました。産官学と立場は変わりましたが、一貫して土木や都市の景観デザインを専門としています。

景観という分野

土木系分野での景観に関する研究室は、都内では東大、東工大、早大、日大、国土館大に少なく、全国で数えても20に達しません。景観分野全体としては、多くの研究アプローチがあり、代表的なものだけでも景観原論（景観の認識や概念に関する研究）、デザイン論（土木分野の構造物の設計・デザインに関する研究）、計画論（アーバンデザインや法制度）、土木史・都市史（構造物の設計手法や、技術者、プロジェクトの過程の解明、あるいは特定の都市の発展過程の土木的観点による解明）などがあります。

この中で現在のところ私が取り組んでいるの



四万十川・沈下橋の風景に立ち尽くす学生



研究事例・街歩きの意味に関する研究。街歩きがどのような意味を持つかを踏まえ、都市環境の整備として何をすべきか検討する

は、景観整備の効果に関する研究、都市や地区のイメージ形成に関する研究で、前者には公共事業の現場で必要な整備を行うための根拠として、後者には歴史・観光などの地域づくりの基礎的知見としての意味合いがあります。

研究室の活動

研究室活動としては卒業研究が中心となりますが、指導方針として、研究としての意義や成果はさることながら、テーマ決めを含めて学生自身が主体的に考えることを重視しています。学生にはとまどいがありました。ようやく「まずは自分で考えて作業しないと前に進めない」ことが浸透してきたようです。

その他、模型制作や写真撮影の勉強会、東京の近代化遺産や街並み・住宅地などの見学会などを行いました。目玉は8月に高知県四万十川流域で行った研究室合宿でした。

聞くと最近の学生は旅行をしないとのこと、話していてもいかにも東京以外の地方を知りません。そこで「美しい日本の姿」を実感させようと、高速バスに学生達を押し込んでいざ高知へと出発しました。建築家の内藤廣さん設計の高知駅の良さはよくわからなかったようですが（これを理解するには多くの駅舎を設計者の観点で見た経験が必要です）、桂浜の青い太平洋には感動したようです。竜王崎では崩落部の擬石コンクリート補修で土木技術と景観の関わりを少しだけ意識させました。有名な四万十川の

景観研究室

沈下橋では、目の前の風景に立ち尽くす彼らに、してやったり、とほくそ笑みます。クライマックスは地元のNPOの方にご指導いただいたの河川生態調査実習、極めて透明度の高い四万十川支流の黒尊川に入り、水生生物の採集・観察をしながら川の姿を実感、時間を忘れてテナガエビを追いかけます。

夜飲みながら彼らに話を聞くと、風景だけでなく、民宿のおかみさんの優しさや、「おいしい」というサービスがおかずを追加してくれる食堂など、四万十の人には大変感動したようで、ある学生は「日本はどこも東京のようなシステムで動いているのかと思ったら違うんですね」と言い、彼らの国土観・人間観にも多少の影響を与えることができたようです。

おわりに

地方分権が進み、社会基盤の整備と地域づくりが融合していく中で、主に自治体からの景観分野の専門家への応援要請は目に見えて増えています。土木技術者にも従来の工学的知識・経験と共に景観に関する素養が求められる場面が増えてくると思われます。本学科の卒業生がそれに答えられる人材となるよう、微力を尽くしたいと思います。

また、学科の就職担当を仰せつかり、主に3年生のインターンシップを担当しております。法土会の皆様にはお世話になりますが、ご支援のほどよろしくお願いいたします。



四万十川支流の黒尊川にて。エビ一匹取るのも簡単ではないことを知る。

フレー フレー HOSEI !

都市環境デザイン工学科 牧野 立平

この度、都市環境デザイン工学科同窓会（旧土木工学科同窓会法土会）より会報原稿の依頼をいただきましたので、着任時から現在まで過ごしてきた大学での回想の一部分を記すことにします。

デザイン工学部 都市環境デザイン工学科の前身は、戦時中に創設された航空工業高等専門学校で、終戦後の1947年（昭和22年）に新制大学として国土復興のために工学部建設工学科（土木専攻、建築専攻）が開設されました。昭和41年4月 建設工学科は土木工学科と建築学科に分離独立しました。当時土木工学科では将来を見据えて教育カリキュラムの大幅な見直しを行い、

時代に対応した内容充実の新設科目を開設し、実施にあたってはこれからの土木技術教育にふさわしい教授陣を招聘し、第一線で活躍されている若手の精鋭土木技術者を非常勤講師としてお願いしました。

当時の時代背景は、昭和30年代の景気高揚に伴って社会基盤整備が進み、アジア地域で初めて開催される東京オリンピック開催に向けた大規模な土木工事が東京を中心に全国に展開していました。

私は昭和41年3月のある日、法政大学工学部 学部長室に土木義雄先生（当時学部長）へご挨拶に伺いました。これが先生との初対面でした。先生は青いピース缶より

両切りのタバコを取り出し美味しそうに紫色の煙を楽しんでおられました。その後、先生の案内で先生の研究室と学科事務室へと向かい中島国明先生と事務担当の西根綾子さんにお会いいたしました。当面の間、4月から土木工学科主任に成られる土木本先生の部屋に同居させていただくことになりました。

土木先生の昼食は大学前の日本ソバ屋「長寿庵」の「おかめうどん」か「月見うどん」でした。もう一軒は洋食屋の「スリー・ロン」。「ニラレバ炒め」や「野菜炒め」をよく食べました。毎週金曜日には部長室にて12時20分より工学部執行部の先生方と各学科の主任との会議（主任会議）が行われておりました。講義が終わると先生方は部長室で出前昼食を取りながら会議が進行していた様です。メンバーの中に欠席

研究室紹介

新任教員として

藤山 知加子 専任講師

このたびは、同窓会の先輩方にこのような形でご挨拶をする機会をいただき感謝いたします。昨年の4月より、専任講師として勤務につき、自分としてはすっかり学科のスタッフの一員となった気持ちではありますが、同窓会の先輩方にお会いする機会はまだまだ少なく、十分にご挨拶もできておりませんでした。この場をお借りしまして、自己紹介と、近況報告をさせていただきます。

私こと、法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科に勤務する以前は、東京大学大学院社会基盤学専攻で特任研究員を務めておりました。その前年に、同大学で工学博士の学位を授与されています。と申しますと、随分若い姿をイメージされるかと思いますが、実はそう若くありません。大学院進学の前に、建設コンサルタント新日本技研株式会社で、7年ほど橋梁設計業務に携わった経験があるからです。さらに以前は京都大学工学部土木工学科、福岡県立福岡高校と廻りまして、生まれは1976年辰年です。

研究についてはこれまで、「鋼コンクリート合成床版の損傷機構と交通疲労限界状態の照査」(図1、図2)「コンクリート細孔に存在する凝縮水の圧力変動と移動による構造物動的応答の変化」などをテーマとしてきました。構造特性と材料物性(力学特性)の両面から物事を考えることを、私自身の大きな研究方針としています。もともと橋梁の会社にいた関係でこれまで橋梁に関する研究テーマに比較的多く関わ



図1 中央道見学会

りましたが、橋梁にこだわっているわけではなく、社会の基盤を支える構造物全般に関心を持っています。

さて近況です。普段は市ヶ谷田町校舎で教育、研究活動を行っています。教育については、満木先生の後任として、鉄筋コンクリート工学や材料力学、物理(一般力学)等の講義を担当しています。1・2年生向けの基礎科目ですので、学生にとって無味乾燥に演習問題をこなすだけの時間とならないよう、自分の経験を踏まえてできるだけ実際の構造物の設計例なども話すよう心がけています。研究については、現在8名の4年生とともにすすめています。8名のうち3名は数値解析による鋼・コンクリート複合構造の検討、2名はソフトウェアを使った橋梁維持管理プロジェクトへの参加、3名は実験によるコンクリートと水の力学的相互作用の解明がテーマです。彼らの居る市ヶ谷田町校舎にありますが、実験に関しては小金井キャンパスで実施しています。

この新しい生活も、気が付けばあっという間に半年余りが過ぎました。これまで研究室の学生と接してきて感じるがあります。それは、彼らの素直さです。約束したことは必ずやりまし、連絡や報告もほぼ怠りなくできます。ときに発破をかければ少し難しいことにも頑張っ取り組みますし、ときにお小言を言えばその次のときには改善しています。本当にいつも驚き感心するものです。同時に、教員という責任の重さも改めて痛感します。なぜなら、彼らは素直さや真面目さをもつ一方で、言われたことはソツなくやるがそれ以外は関心をもたない、ほどほどの目標を設定してほどほどの成果で満足しがち、という傾向もいくらか持ち合わせているように感じたからです。私は、彼らは自分で思っている以上に多くのこ

※藤山先生は来年度より「准教授」となります。(編集部より)

複合構造研究室

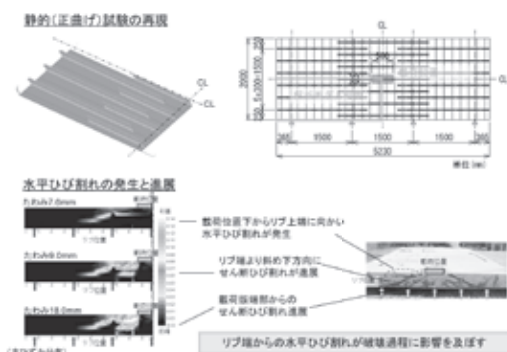


図1

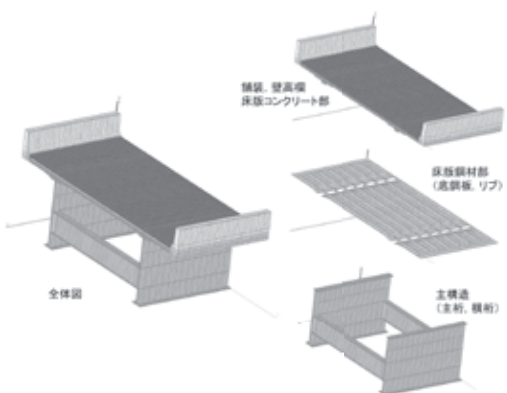


図2

とを達成する力を持った学生達だと信じています。それをどう伝えていくのか。大学の仕事の難しさと面白さを日々感じるどころです。

このような、まだまだ経験浅く日々試行錯誤の新任教員の身にとって、本学科の同窓会活動の充実は、非常に心強いものです。たとえば、先般10月6日に行われたOBと学生の交流会のようなイベントは、社会で活躍される先輩方と学生がざっくばらんに話している中で、学生が自分の将来を具体的に考え、ひいては学生生活のモチベーション向上につながる大変有意義なものと思いました。今後もいろいろな形で、同窓会の先輩方のお力添えを、お願いいたします。これからも、どうぞよろしくお願い致します。

者がいて出前弁当が残ると、部長秘書の鶴田さんから残り物の処理依頼の電話が来しました。全速力で廊下を駆け抜けて部長室へ受け取りに行きました。それらは私の食べたことの無い特上の「鰻丼」や特上の「にぎり寿司」だったり、またあるときは「カツ丼」でした。毎日部長室で会議があればいいなと思いました。本当に美味しい弁当をいただきましてご馳走様でした。

昭和42年 工学部大学院開設に伴い土木工学科の研究教育施設の一環として水理実験室が建設される事になり、その準備作業をしました。校地南側の土手付近が実験室の建設予定場所となりました。水準測量や平板測量と土量積算、それらのデータを基に実験室の図面を数十枚のA4~A2のトレーシングペーパーに描きました。図面は製図の講義のご担当であった土本先生から

詳細にわたった訂正箇所を指摘され、その後青焼きのコピー機で複写印刷をして資料として提出しました。

昭和43年、ついに水理実験室(後に水工実験室)が完成しました。以来、唯一の施設であった開水路を用いた実験データを学生諸君と一緒に汗と涙で測定しました。それを基に何編かの論文を書く事が出来、また英字論文は海外国際会議にて発表いたしました。

最後になりますが在学中より現在に至るまで、長い間お付き合いいただき、ありがとうございました。また人情味に溢れ、優れた能力と手腕を持つ面倒見の良い数多くの卒業生の皆様方には大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。次第です。

今年春に退職いたしますが時間の許す限りお付き合いいただければ幸いに存じま

す。これからの法土会の益々の発展を楽しみにしております。

フレー フレー 法政土木!

追伸

JR中央線は連続立体交差になりましたが、東小金井駅北口の飲み屋「スタミナの城」の大統領は健在です。ご報告まで。



在りし日の水工実験室
左側に開水路 全長40m 可傾式

『OBと学生との意見交換会』の報告

都市環境デザイン工学科が、市ヶ谷の地に移転して本年度で4年がたちました。その間、私も法士会では、本学科の存在を地域の皆様に早く知っていただくための一助として、OBと学生による『外堀清掃活動』を行ってきましたが、一応初期の目的が達成できたと考えました。

そこで、次のステップとして『社会で活躍できる人材のために』を目標に、『OBと学生との意見交換会』を平成24年10月6日に開催しました。今回は、第1回目ということで、試行的に3部構成で行いました。第1部は、事前アンケートに対するOBによるパネルディスカッション、第2部は、各業種のOB・OG等の自由意見交換会、第3部は、懇親会で実施しました。

当日は、3連休の初日にもかかわらず約40名のOB・OGが、学生のために忌憚のない意見や学生が抱えている就職に対する不安に対して真摯に対応しておりました。

今回の問題点・改善点を検証し、来年度以降、『学生と社会』との橋渡しになるような会にしていきたいと考えております。

山田 誉 理事（1990年卒）



第1部



第2部



第3部

法士会東海地域同窓会の報告

平成24年度の土木学会第67回全国大会が、平成24年9月5日から7日までの3日間名古屋大学東山キャンパスで開催されました。これに合わせて法士会東海地域同窓会が、9月6日タイガーカフェ伏見店において、教室から5名、学生18名、OB27名の参加を得て盛大に行われました。法士会本部からは法士会会長、理事1名が参加しました。主催者、法士会会長の挨拶に続

き、学科主任宮下教授より大学の現状報告が行われました。乾杯音頭の後、出席いただいた先生から、研究室の紹介、参加OBからの近況報告があり、校歌斉唱の後解散しました。

また、東海地域同窓会会長が磯貝 豊さん（土85）に、OBの満場一致で決定したことを報告します。

伊東 賢 理事（1981年卒）



活況を呈する社会工学セミナー

社会工学セミナーはOBの皆様の学生時代の友との再会、現在抱えている業務の情報交換の場として開催しています。昨年7月9日と11月27日の2回、法政大学市ヶ谷田町校舎にて開催されました。7月

は新しく都市環境デザイン工学科に着任されたお二人の先生、11月はベトナムからの交換研究員のお二人の先生にご講演いただきました。今年からOBの皆様で開催案内を広く配布したところ出席者も増え、講

演後の懇親会における交流も活発になってきています。より一層この社会工学セミナーが活用されますことを願っておりますので、多くのOBの皆様のご参加をお待ちしています。

中村 徹 理事（1978年卒）

編集後記

昨年に続き、今年もお二人の方の恩師が退職されます。草深先生、牧野先生お疲れ様でした。

草深先生は、昨今ご多忙とのことで、次回『法士会報』への寄稿をお願いしており

ます。ご了承ください。

また、牧野先生におかれましては、同窓会とのパイプ役として社会工学セミナーでは御尽力いただき大変感謝する次第です。

お二方ともご退職され、まずは一休みというところでしょうか？ これからの活躍期待するところがございます。

さて、今回もホームカミングデーに行き小金井キャンパスの進捗を確認してきました。新校舎は、ほぼ々々完成していました。昔の実験棟は、きれいな自然漂う『くつろぎの場』というところでしょうか。

法士会報編集委員

山川宏明（1984年卒）